
世界を守りし力

靈琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を守りし力

【NZコード】

N3938BA

【作者名】

靈琉

【あらすじ】

はるか昔、神は魔物を生み出す霧と霧を操る者……霧者を生み出した。人間達は霧者に対抗する力を神から授かりかろうじて霧者を打ち倒した。だが、霧は消えず、今も人間と魔物の争いは続いている。

* RPGによくあるようなストーリーで進めていきたいと思つています。
*

プロローグ（前書き）

「だつて、つまらなかつたから」

by 神

プロローグ

はるか昔のこと

神は世界を創造した

まつたく何も無い世界

神は陸、空、海を生み出した

神は命を創り出し見守っていた

陸は縁が溢れ

空では鳥が羽ばたき

海では魚が優雅に泳ぐ

流れ行く時間の中で

ただ繰り返される日々に

神は退屈し、変化を求めた

神は1つの種族に高い知能を与えた
その種族は道具を作り使い始めた

神は歓喜し、さらに知能を与えた

種族は自分達で住処を作る

住処は集落となり街となる

街は大きくなり国となる

種族は平和に仲良く暮らしていた

神は再び退屈した

困難にぶつかろうとも解決する

そんな種族……人間に

ならば、と神は災いを「えようと

人間に試練を与える

魔物を生み出す霧

霧を管理するを作る力を持つ者
霧者を生み出す

魔物は人間を襲い、街を壊す

人間は立ち向かおうと武器を作る
いくつもの命が魔物に奪われる
神は人間に魔力を与える

本来は悪魔が使う術を
魔法を使えるように

魔法の使用で魔物に対抗する人間
だが霧者には勝てなかつた

面白くない

そう感じた神は六人の人間に力を
協力することで霧者を

霧者をも上回る力を与えた
シンドヤ

神者と呼ばれ
シンジヤ

人間達の先陣を斬つて霧者に
立ち向かつた

かるうじて霧者に勝つた人間は
霧者を封印する

だが、霧は消えず残つたまま
今も世界を覆つている

神は霧を防ぐ結界を作る力を
人間に与えた

その力を持つ一族を神の遣いを
ケンジヤ
遣者と人間は呼ぶ

人間達は結界を張つた街に住み
強い結界を張つた街は都市となる

神者の力は光闇炎水風地
カミノチカラハコトハアマツクニイミツウ

彼等の子孫達も力を受け継ぎ
国王や旅人はたまた商人など

様々な場所で生き続けている
再び霧者が現れる

その時のために

「これがこの世界なら誰でも知ってる御伽噺。この御伽噺は眞実で
もあり眞実ではない」

「神は神者を作り、霧者は魔王が作った。神と魔王、天使と悪魔：
対になる存在があるように霧者にも対になる存在がないとフヨ
アじやない」

「霧もずっとこのままつてワケにはいかないよね。だから、魔王と
相談して霧を止めるための手段を作つてあげたよ。人間のために…
…」

「おつと……今回はそこまでしか話せない。……紹介が遅れたね。
私は人間から神と呼ばれている」

「……そうだね、ついでに話しておこう。これから始まるのは神者
と霧者の子孫達の物語。彼等には再び戦つてもらわないと……私の
退屈しのぎにね」

第1話（前書き）

「物の価値は人それぞれだ」
by サイト

第1話

オルフレイム大陸にある大陸最大の都市クロイス。その中央には城がある。城の敷地内に存在する王国騎士団団長であるプルト・ティザインはある食堂へ来ていた。

食堂『風の調べ』はプルトの妻エミリとユミリの学生時代からの友人達で経営している。食堂は小さいながらも老若男女に人気だ。客が居ない時間はほとんどなく、職業も様々な者が訪れる。

「お、今日も混んでるな」

「あ、プル君。いつもの席空けてるよ」

「ん、ありがとな」

「いえいえ……愛する夫のためですから」

ユミリの言葉に周りの客がからかいの言葉をかける。

「いつもお熱いね」

「ふん、ついやましごとではない、全くないぞ」

「……そういえば、サイトは？」

「サイトなら『安らぎの森』でレアナちゃんと遊んでるわよ」

プルトの息子であるサイトは幼なじみのレアナと一緒に遊ぶ」と

が多い。

「確かにサイト君は18歳になつたんだっけ？ 魔術高等学校卒業後は家継がせるのか？」

「本人はそういうてるし、私も賛成。……だけど、プルトがね」

「俺の息子だから騎士団に入れさせる。実力はあるんだから大丈夫だ」

「…………だつて」

「その前にレアナちゃんとめでたくゴールインしちゃうかもな

「な！ いくらなんでも卑すぎだ！」

「おこおこプルトさんよお、アンタだつて18で結婚して子供作つてよ……なあ、H/M/Cさん」

「はは……。どうもレアナちゃんはサイトの」と好きみたいなんだけど、肝心のサイトがねえ」

「……鈍感つうか色恋事には興味ないみたいでよ、休日は本を読んでるか森で剣の練習だぜ」

「森ねえ……たしかお一人のハジメテも……」

「な、なぜそれを！」

「プルトも最初色恋事には興味ないんじゃなかつたか？」

「色恋事には興味なかつたけど学校で女子のスカートをめぐるのが日常茶飯事のエロガキだったよな」

「な……ほ、ほらアレだ、思春期だったからな」

「へえ……そりゃねればフル君のベッドの下からいかがわしい本が…」

…

「か、勝手にあさるんじゃねえ!」

「……やっぱり若い女性の方が好き?」

「いやいやミコさんがあくなければウチのかみさんばびつなるんです? まだ、ミリさんは36じゃないですか」

「36で18の子供が居るなんてなあ、俺は36だが、子供は中学に入ったばかりだぜ」

「さて、そろそろ仕事だ。行くぞ、レイル」

「へへへ……それじゃじきじきまでした」

「はーい、また来てくださいね」

「もちろん……フルトはちゃんと働けよ」

「働いてるよー……つたぐ」

2人の客が出て行き、店内には隅に一人客が居るだけ。フルトは

いつも座っているカウンター席に腰掛ける。

「こつもので良じよね？」

「ああ……伝えないといけないことがあるんだ」

「ん、何？」

「……しばらく俺は街を離れないといけない」

「……何で？」

「霧を消す方法が見つかってな、その方法に必要な道具を取りに行
くんだ」

「……霧が消えるの？」

「ああ、『ヴェヌア遺跡』の調査隊から連絡があつたんだ」

「霧が消えたら魔物が居なくなるんだよね？」

「ああ……今日出発しないといけないんだ。出発の前にサイトに会
いたかつたがしかたないか……」

「サイトに私はから言つておくからね」

「ああ……」

「? どうかしたの?」

「いや……何だか嫌な予感がするんだ。『氣のせい』だと思つが……」

「……『氣をつけてね』

「ああ、もううるんだ」

クロイスの西にある『ホラホロの森』。そこには一人の少年と少女がいた。

「なあサイト……謝るから降りてきとよ」

「お前が登つて來い」

「……私が高所恐怖症つて知つてるくせ」

「……ふん」

木の上で太めの枝に座り幹にもたれ本を読んでいるのはサイト・ディザイン……フルトとヒリコの息子で魔術高等学校3年。

「じめん、お願ひだから機嫌なおしてよ」

サイトがいる木の下にいるのはレアナ・アスペクト。サイトの幼なじみで魔術高等学校3年。

「……また本を汚されたら嫌だから降りない」

サイトが木に登ることになつた原因。サイトが木によりかかつて本を読んでいると、レアナが何の本を読んでいるのか気になり覗き込む。

そこまでは良かったがレアナはジュースを飲みながら覗き込んでしまい、ジュースが本の上にこぼれてしまった。

「……本を汚されたくらいで」

「高かつたんだぞ！ 何ヶ月もバイトしてようやく買えたの」「……」

「そんなに高いなら持つてくるなよ……」

「うるさい…… 苦労して買った本を…… そんな安物のジュースで汚しゃがつて。せめて、もつと高いジュースをこぼせー。」

「……そういう問題なのか？」「……」

「……」

サイトは伸び本を読むことに集中する。

「……こいつだったの？ 買い直すから

「自分で貯めたお金で買つ」と価値があるんだ

「……ねえ、本当に」「めん。お願い、降りてきて」

「……ひが」

サイトは舌打ちをして、木の上から飛び降りた。

「あ……」

「今度本を買つてくれ。安物でいい……それで許す

」
「…………うん」

レアナはサイトの手をとつて駆け出した。

「お、おー。どこ行くんだ？」

「本屋」

「は？…………今からかよ」

「何事も迅速に…………ね」

2人はクロイスで最も大きな本屋『知識の扉』に到着した。サイトはサッサと目的のコーナーに向かつて歩く。サイトを慌てて追いかけるレアナは、サイトを見失いそうになってしまつ。

レアナはキヨロキヨロしながら店内を歩いていると本を手に取りバラバラとページをめくつているサイトを見つけた。

「ん……サイトって神話に興味あつたんだ」

「…………まあな」

「あ、これ知ってる。『神者と霧者』……世界で一番有名な御伽噺」

「そうだな。……これに決めた」

サイトはレアナに一冊の本を渡した。『霧と結界』……これも御伽噺の一つで霧を防ぐ結界を作る遺者に関する物語。

「え！ 本当に」んな安物で良いの？」

「……言つただろ？」

「お、おお……置つけねえ」

レアナが会計を終えてサイトに本を渡した。

「……大好きだよ」

サイトはそつと出て店を出で行つた。

「あ、うん……うん、聞いていくなよ。」

レアナはサイトを慌てて追つていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3938ba/>

世界を守りし力

2012年1月10日23時45分発行